

# 本多有香さん

(マッシュャーII犬ぞり師)

## 自分で育てた犬で、雪原を走りたい

学生時代に旅先で出会った犬ぞりレースが忘れられず、カナダに渡って十五年。いまでは自分の犬舎を持つマッシュャー(犬ぞり師)となった本多有香さんの著書が出版された。夢を追い続けたその軌跡は、内向きの時代に大きなインパクトを与えてくれる。

なぜあんなにうれしそうなのか

——そもそもこのきっかけは、学生時代のカナダ旅行だったそうですね。

大学三年のときに雑誌で見つけた格安のオーロラツアーでイエローナイフという町に滞在したんですが、大きなオーロラももちろんすごかったけれども、初めて見た犬ぞりに激しく感動してしまいました。

そりを引いて走るなんて大変なことだろうに、なんでもあの犬たちはあんなに懸命にそりを引き、しかも心

からうれしそうにしているんだろう。だったら、私も自分で育てた犬たちと一緒に、ワアーツどこまでも雪原を走っていきたい。どこか遠くの、すごいところまで行ってみたいと、イメージがふくらみました。

——もともと、特別に犬が好きだったんですか？

私が三歳のころからわが家には紀州犬がいたんですが、いつも毅然としていて洋犬のようにべたべた甘えてこないところがたまらなくかわいい(笑)、という犬でしたから、まあ日本のどこにでもいるような、ごく普通の犬好きだったと思います。

——そんな普通の犬好きが、せっかく就職した職場を

二年半で辞めて、マッシュャー(犬ぞり師)になるために単身カナダに渡ってしまった。そこまで犬ぞりへの思いが募ったのは、どうしてでしょうか？

もともと変わり者だった、ということですね(笑)。

大病院の医師をしていた父がとても厳格な人だったので、父に対する反抗心が根にあったのかもしれない。子供の頭では父のことがよく理解できずにとっても怖い人だと萎縮して、自分に自信をたてないまま育



ほんだ・ゆか 一九七二年新潟県生まれ。岩手大学農学部卒業。九八年にカナダへと渡り、犬の世話係として修業を積む。二〇一二年の四度目の挑戦で、世界一タフなレース「ユニコン・クエスト」を日本人女性として初めて完走。現在、トウヒの森を自力で切り開いた犬舎で、二十頭の犬と暮らす。このほど初の著書『犬と、走る』(集英社インターナショナル)を刊行。

ってしまいました。その反動から、きちんと枠の中に収まることなんかしたくないという気持ちが出てきたんじゃないかと、いまになって思います(笑)。

それと、小学生のときからなぜか自分は長く生きないんじゃないかと思っていました。中学生にはなれない、次は社会人にはなれないと思いつつ、あのころは四十になるまでに死ぬと感じていました。死にたい願望なんかちつともないのに、四十で死んじゃうんだからいまはこれをやらなくちゃ、あれもやらなくちゃと生き急ぐようなところもありました。とにかく早く行動しないと時間ももったいない。そんな気持ちがあつていた犬ぞりへの憧れに火をつけて、パアーツと燃え上がったのだと思います。

——なるほど。そんな思いに駆られていたから、犬ぞりをやっている犬舎を紹介してほしいと、いきなりカナダ観光局にFAXを入れちゃったわけですね。

十分後に返事がきて驚きました。イエローナイフに住むグラント・ベックという、カナダチャンピオンに四回もなった人の連絡先が書いてあつたんです。ただしどしい英語でさっそく手紙を書いて送ると、グラントから履歴書を送れというメールが届き、あわてて履